

# 主体的に学習に取り組む子どもの育成

岡山県玉野市立山田小学校

全校児童数	64名
全クラス数	7クラス
教職員数	17名

## Plan：取組時の課題と目的

### 1 取組時の課題

本校の児童は、明るく真面目で、与えられたことをきちんとこなす児童が多い反面、「自分からやってみよう」という思いをもって取り組む姿勢には課題があり、休み時間の遊びの内容が固定化しているなどの課題があった。また、教員では、TT体制をうまく生かす方法が分からないなど、授業体制や体育科の授業作りに不安があった。

### 2 取組の目的

体育科における「主体的に学習に取り組む姿」を目指すにあたって、「体を動かすことが好きだ」ということ、「楽しいと感じながら体育の授業に参加している」ことの2つを大切にしていきたいと考え、以下のことを目指して研究を行った。

- ①運動に親しむ環境作り…環境部の取組
- ②楽しくて身につく授業作り…授業研究部の取組

### 1 環境部の取組

#### (1) 遊びの充実を図る活動

朝会の時間を使って、教員発信の遊びの紹介を行った。余っていた一斗缶、ほとんど使われていなかった一輪車や竹馬などを紹介し、空気の補充等をこまめに行ったり、手すりを設置し、一輪車練習コーナーを設けたりするなど、環境整備にも努めた。また、教員発信だけでなく、児童発信の遊びを充実させた。委員会の児童や6年生主体の遊びでは、異学年が仲良く遊ぶ姿が見られた。



#### (2) 体力、運動能力を高める活動

保護者や地域の人に見守りの協力をいただき、校外にコースを設け実施した「マラソン大会」、マラソン大会に向けた「業間ペース走」、複数の技を連続で跳べるようになることを目指した「なわとびだんご」の取組、「いきいき岡山っ子☆運動習慣カード」などに取り組んだ。

## ●工夫したこと

### (1) 苦手な運動能力にも親しめるきっかけ作り

教員発信の遊びの紹介をする際、新体力テストの結果で児童が苦手としていた「投」の技能を高めるきっかけ作りを与えることができるよう、意図的に的当てやボール投げなどを紹介した。

### (2) 掲示物などの工夫で高め合える環境作り

複数の技を連続で跳べるようになることを目指した「なわとびだんご大会」では、高得点だった児童の技や名前を掲示し、次への意欲につなげるようにした。低学年でも、取り組めるように複数ではなく、一つの技からでも挑戦できるようにした。



### 2 授業研究部の取組

#### (1) 「やってみよう」が連続する単元構想

主体的に学習に取り組む子どもの姿を目指すため、低学年の「ボール運び鬼」では、ボールを宝、自分を忍者に例え、ストーリー性をもたせ、具体的な自分の動きを忍者の技で表し、全員で共有するようにした。攻め方を選択するときに、自分の名前を書いたマグネットを動かすようにした。視覚的にも分かりやすく、自分の考えを表現し、友達の考えを共有できるようにしたことで、活発な意見交流につながった。



#### (2) 表現運動の授業作りに挑戦

児童の実態を踏まえ、あえて児童が苦手としている表現運動の授業作りに取り組んだ。高学年「わたしたちの地球」では、ゲーム要素を取り入れたり、個からグループへと段階を経て取り組ませたりするなど、スモールステップで心も体もほぐしていくことで、苦手意識を払拭できることが分かった。



### (3) 学習のパターン化、場づくり

中学年「小型ハードル走」では、児童が見通しをもって活動できるように、学習をパターン化し、自分が挑戦したい場を選んで準備を友達と協力してできるようにした。こうすることで、T1もT2も、児童が活動している間は、一人一人としっかりと関わることができ、児童同士も、「する、みる、支える、知る」という多様な関わりができた。また、体育の授業の中で、振り返りをするを大切に、その思いを次の授業のめあて作りにつなげられるようにした。



### ●工夫したこと

#### (1) 授業5を徹底し、授業をパターン化する

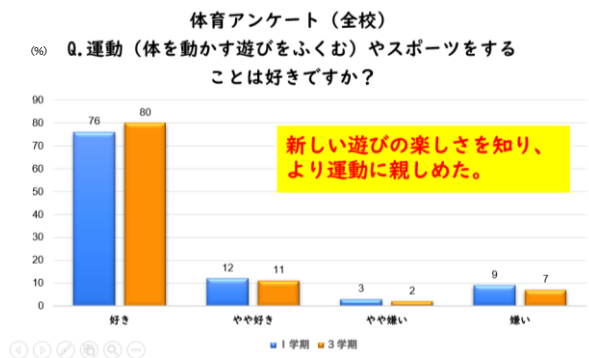
体育の授業でも、めあてやふりかえりを大切にすることで、子どもたちが主体的に学習に取り組めるようにした。めあてについては、単元を貫く共通のめあてを子どもにしっかりと認識させた。また、自分の能力を伸ばすために、自分でめあてを考えさせることも大切に。体育の授業の中でしっかりと振り返りを行い、気づきを発表させたり、記録に残したりするように工夫した。

#### (2) 自分で選択する場づくり

「ボール運び鬼」では、鬼をかわしながらボールを運ぶ方法を複数の中から自分で選択させる、「小型ハードル走」では、自分で挑戦したい場を複数の中から選択するなど、自分で選択する場づくりを行うことで、「挑戦したい」「やってみたい」という児童の主体性を引き出すことができた。

### Check：取組の成果

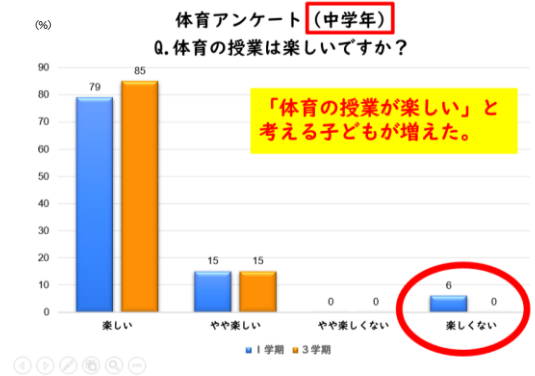
#### (1) 環境部の成果



1学期と3学期の結果でさほど変化はないものの、環境部の取組で、新しい遊びを紹介し、遊びの充実を図ったことで、様々な遊びの楽しさを知ることできた。いろいろ

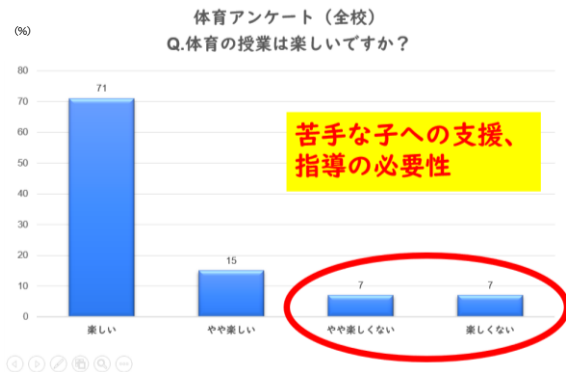
んな運動体験を通して、初めて取り組んだことも「楽しい」と感じる児童が多いことは、より運動に親しむことができたのではないかと考える。今後は、新体力テストで求められるような技能の向上につながる取組についてももっと考えていきたい。

### (2) 授業研究部の成果



1学期に「体育の授業が楽しくない」と答えた児童が3学期には好意的になっていることが分かる。これは、学習の場を選択し、自分に合った場で挑戦することで、自信をもって取り組むことができたからではないかと考える。子どもの主体性を引き出すことができるよう、今後も授業改善に努めていきたい。

### Action：今後の課題



アンケートの結果から、運動が苦手な子への支援、指導の必要性を強く感じた。そこで今後は、単元の前後に、これまでの運動経験などより具体的な質問をし、児童の実態把握に努め、適切な声かけをするなど、アプローチをしていきたい。また、体育の授業の中での効果的なICTの活用についても考えていきたい。

### ◎体育授業の充実がもたらす波及効果

児童にとっては、ルールを守る、勝敗を受け入れる、友達との関わり合いを学ぶなど、学級経営に直結する大切なことを体育の授業を通して学ぶことができた。また、教員にとっては、授業5や単元全体を見通した指導を意識して授業を行うことができることにつながった。